

ピアノ初学者のための使用テキストの実態と傾向

—全国の幼稚園教諭・保育士養成校のシラバスに基づいて—

辻 浩美・鹿戸 一範・田中 麻衣

Analysis of Textbooks for Piano Beginners

— Based on a Nationwide Survey of Syllabuses Used by Training Schools
for Kindergarten or Nursery School Teachers —

TSUJI Hiromi, SHIKATO Kazunori, TANAKA Mai

キーワード：ピアノ初学者、バイエル、教則本、シラバス、保育者養成

はじめに

近年、多くの保育者養成校では、ピアノ経験のない学生や音楽経験の浅い学生の入学が増加している。幼稚園教諭や保育士を目指して養成校へ入学してくる学生の中には、十分な演奏技術や保育現場で対応できる弾き歌いの実践力を身につけることができないまま、教育実習や保育所実習に臨むことになるケースも少なくない。こうしたピアノに不慣れな学生の多くは、特に子供を前にした弾き歌いの実践は大きな不安要素となり、実習に対して、様々な不安や緊張を抱えることに繋がっている。しかしながら、多くの養成校では学生一人当たりに対する指導時間は限られており、教員は決して十分とは言えない時間の中で指導し、実習やその後の保育現場へ送り出さなければならないのが現状である。

こうした状況を踏まえ、教員は学生に対して実習への不安を軽減させ、将来にわたり適切な保育の実施が可能となるよう、短期間で効率よく基礎的な演奏技術や弾き歌いの実践力を養うための指導方法を探求していかなければならない。

今日まで、カリキュラムや授業形態、使用教材の比較、学生の資質や指導法について、多角的な

アプローチによる様々な研究がされてきた。このことから、常々多くの教員が指導内容やその方向性について苦心している様子が窺える。

本研究は、全国の保育者養成コースの短期大学・大学で公開されているシラバスを手掛かりに、それぞれの養成校がピアノ初学者の指導に際し、どのようなテキストを採択しているかを調査し、分析、考察を行うものである。本研究によって、今後の教授方法の改善の一助としたい。

I. テキスト研究の経緯

1. 日本における教則本の流れ

今日、日本では膨大な数のピアノ教則本が市販され、新たなメソッドによる教則本も次々と出版され続けている。大手楽譜出版社の一つ、全音楽譜出版社によるピアノ初級第1課程では、練習曲テクニックとして、バイエル、バルトーク、トンブソン、バーナム、ツェルニー、グルリット、ハノンといった定番の教則本が揃う。特にバイエルは、『標準バイエルピアノ教則本』『全訳バイエルピアノ教本』『指づかいつきバイエルピアノ教則本』『子供のバイエル』『新しいバイエルピアノ教則本』等、多種多様である。バイエルに関しては、音楽之友社やドレミ楽譜出版社を始め、多くの出版社からも数種刊行されているが、1995年には約40種ものバイエルが出版されていた¹。

フェルディナンド・バイエル Ferdinand Beyer (1803 - 1863) が作曲したこの教則本は、通称「バイエル」と呼ばれ、バイエル離れが叫ばれている現在でもなお広く愛用されている。

『バイエル教則本』²は、今からおよそ130年前の1880年、外国人教師であったルーサー・ホワイティング・メーソンによって、日本初の音楽教育機関・音楽取調掛において、音楽伝習生のために使うピアノ教科書として持ち込まれた。メーソン帰国後、取調掛は米国留学から帰国した瓜生繁が『ウルバツハ教則本』³を導入し、『バイエル教則本』とともに4年制のピアノ学習カリキュラムに組み込まれた。『ウルバツハ教則本』は入門から上級まで4段階に分けて209曲をシステマティックに学ぶ教則本で、音楽理論や手の形、指の練習、簡単な練習曲、小品から成る。しかし、第3段階で早くもクーラウやクレメンティ作曲のソナチネが含まれ、初学者にとっては困難を極めた。この事態に対して、東京音楽学校音楽教官・奥好義はより楽しく音楽的な曲集の必要性を説き、『バイエル教則本』を大幅に簡略化した版として、『洋琴教則本』を編集する。『洋琴教則本』は1890年より東京音楽学校だけではなく、高等女子師範学校を中心に長い間使用され、日本におけるバイエルの出発点となった⁴。

大正期になると、ペータース社の版を底本としたバイエルを翻訳した日本最初のバイエル、『ピアノ教則本』（日本音楽協会）が出版される。この流れは現代の『標準バイエル教則本』へと繋がった。

戦後、高度成長期のピアノの普及とともに、ピアノを習う子どもの数が増加する。バイエルは初学者から体系的に学べ、簡単に入手可能な教則本として爆発的なブームを巻き起こした。その原動力となったのはピアノ教育者達によるバイエル改良版の出版である。なかでも《おべんとう》《おかえりのうた》の作曲者として名高い、一宮道子が編集した『子どものバイエル』は、1947年に初版された後、1962年まで重版され、「一宮バイエル」と呼ばれ親しまれた。

しかし、1980年代終わり頃、バイエル批判が一斉に始まった。バッシングを決定付けたのは、1987年に初版されたロナルド・カヴァイエと西山志風共著『日本人の音楽教育』（新潮社）であり、1997年まで13回重版されたロングセラーである⁵。そこでは、「バイエルは日本人だけが使っている古い教材、時代遅れ、作曲者バイエルは2、3流の作曲家、内容は非芸術的でつまらない退屈な曲ばかり」⁶と、容赦ない言葉が続く。バイエル離れは確実にこの頃から始まったと言えよう。

一方、ヴァン・ド・ヴェルド『メトード・ローズ』を皮切りに、70年代ではグローバー『ピアノ教本』、バステイン『ピアノ・メソッド』、ステッカー『ラーニング・トゥ・プレイ』等の教則本が翻訳出版され、90年代には日本人による教則本も出版され始めた。現在では数百種類もの国際色豊かな教則本がラインナップし、教材選択に対する指導者の力量が大いに試される時代となった。

2. 先行研究

全国の保育士・幼稚園教諭養成校におけるピアノ教則本の採択状況について、柏瀬・牛田(1986)⁷では1986年に短期大学・大学から200校を無作為抽出し、択一法によるアンケート調査を行っている。回収率は80%と高く、結果は「バイエル教則本」（以下、バイエルと略記）の採択が121校（76%）、バイエルからの抜粋によって編纂されたテキストの採択が26校（16%）と、バイエル系教則本の採択が全体の92%に及んだ。

しかし、宮脇(2001)⁸が2000年に保育士資格または幼稚園教諭免許状が取得出来る大学90校と短期大学216校を対象として実施したアンケート調査では、バイエルの採択率は全体の54%に下がっている。アンケートの回収率が40%と低かった点を考慮しても、1986年に76%であったバイエル採択率が54%にまで落ちたのは、1980年代末頃に起こったバイエル批判との関係が考えられる。

近年の研究としては、小倉 (2013)⁹が2013年に埼玉県を中心とした関東近県で、保育士、幼稚園教諭及び小学校教諭の養成校36校を対象に自由記述方式でアンケート調査を実施している。結果は29校から返答(回収率81%)があり、72%の養成校がバイエルまたはバイエルを含むテキストを採択していた。この調査では、テキストの採択状況とともに授業形態についても調べており、テキスト全般についての意見を保育者養成校の教員に求めている。アンケート調査の結果から、現在バイエル系教則本を採択している理由として、初心者が段階を追って無理なく演奏技術を身に付けられる、採用試験にバイエルが使われているため初心者に指導しやすい、大学生の初心者に馴染んでいる、教員間で連携しやすい等が挙げられた。また、採択したテキストの過不足を補う意味で、各養成校が授業形態に趣向を凝らす様子も窺える。Music Laboratory 授業の活用では、ピアノの学習経験が少ない学生に対しても指導効果が見られ、進度上の個人差を補填するために授業内で拍やリズムの指導を取り入れることにより、学生の自学自習の意欲を引き出す一例を紹介している。

一方、弾き歌いのテキストに関する先行研究として、衣川・山崎・坂井 (2013)¹⁰による論文がある。近畿圏の22校の短期大学・大学の弾き歌い用テキストについて、どのようなテキストが採択されているか、またテキストの伴奏形態、テキスト掲載曲の分析についても調査・考察されている。

以上の先行研究から、1980年代半ば頃までのバイエル系テキストの採択率は非常に高く、9割程度にまで達していたものの、80年代末のバイエル批判を受けて低下が起り、近年に至るまでに50%から70%程度の間で推移してきたことが判明した。

しかし、現時点では、ピアノテキストと弾き歌い用テキストの採択状況に関する全国規模での調査研究は見当たらない。また、先行研究はいずれもアンケート調査に頼っているため客観性に欠

け、研究対象の学校数や地域性、及び回収率の点でも問題が残る。

我が国における保育者養成教育の更なる水準向上を目指し、ピアノ教則本と弾き歌い用テキストの採択状況を全国規模で調査するためには、従来の枠に囚われない視点と方法論が求められるだろう。

II. テキスト分析

1. 研究対象校の設定

厚生労働省のホームページ (www.mhlw.go.jp) に公開されている最新の情報「指定保育士養成施設一覧」(平成28年4月1日時点)に基づき、次の手順で研究対象校を選別した。

- ①保育士資格、幼稚園教諭免許状の双方が取得できる短期大学及び大学とする。このうち開講形態は昼間部と夜間部通学制に限定し、通信教育制及び養成所は除外した。
- ②各校のホームページから、情報公開されているシラバスを閲覧する。シラバスがその学校の教員、学生、関係者でないと開けない、現時点でシラバス作成中、あるいはシラバスを開示していない場合は対象外とする。

以上の結果、「指定保育士養成施設一覧」の653機関のうち、上記の条件に合う363の短期大学及び大学を今回の研究対象校とした。

2. 分析の方法

対象校のシラバスから、ピアノ実技に関連した授業で使用する初学者用の使用テキストを抽出する。授業科目名は「音楽I」「音楽A」「器楽I」「音楽実技I」「音楽表現I」等を判断基準とした。まずピアノ教則本と弾き歌い用テキストをそれぞれ抽出し、その際両方のテキストを使用しているか、或いはどちらかを単独使用しているかという点にも着目する。また、使用テキスト欄が空欄の場合は、授業計画からその手掛かりを得ることとした。

Ⅲ．分析結果と使用状況

1. 分析結果

研究対象 363 校のシラバスを調査した結果、ピアノ教則本は 302 校（83%）、弾き歌い用テキストは 227 校（63%）の使用を確認することができた。また、半数近くに当たる 174 校（48%）がピアノ教則本と弾き歌い用の両テキストを使用していることが判明した。

一方、単独でのテキスト使用は、ピアノ教則本は 128 校（36%）に対し、弾き歌い用テキストは 53 校（15%）に留まる。

しかし、ピアノ初学者が基礎的なピアノ技術を身につけないうまま、即座に弾き歌いを学習するのは困難ではないかと推測される。この 53 校の指導方法にも関心が持たれる。

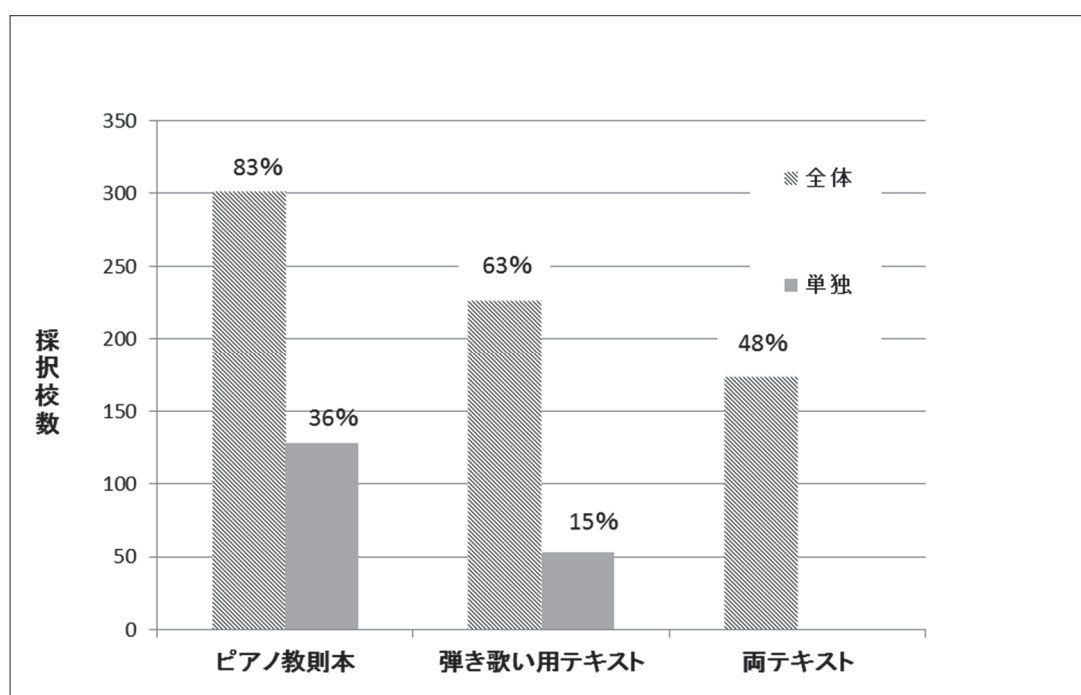
〔図 1〕は以上の分析結果をグラフ化したものである。

2. ピアノテキストの使用状況

全国の養成校において使用されているピアノ教則本の使用状況を〔表 1〕に示した。本研究では、短期大学・大学のホームページ上のシラバスの調査によって得られた情報を基にしているもので、実際に使用しているテキストに即しているかについては不確実な部分があることを付言しておく。

〔表 1〕を見ると、実に多様なテキストが使用されていることがわかる。ここで、テキストの対象者について着目してみると、養成校の学生を主たる対象者に置くテキストと、養成校の学生に限らず広く一般を対象にしたテキストに大別される。このうち、後者については、バイエルの名称を冠したテキストが過半を占めていることから、バイエルという一群を設定することが適当である。即ち、養成校で使用されるテキストは、①各社から刊行されているバイエル、②バイエルを除く一般のピアノ教本、③養成校での使用を前提として作成されたテキストの 3 つに分類することができる。

〔図 1〕 各使用テキストの割合



この3群が全体の約90%を占め、残りの約10%に当たる28校は、大学独自に作成された市販されていない教材や学生各々のレベルに合わせたプリント配布で授業を行っている。使用テキストとしての状況を把握することが困難であることから、便宜上「その他」として分類し、研究対象外とした。尚、複数の教則本を採択している学校も認められるため、調査校数と表中の合計とは一致しない。

ピアノ教則本を使用している養成校302校のうち、約60%にあたる166校がバイエル、またはバイエルを底本とするテキストを採択している。『標準バイエル教則本』『全訳バイエルピアノ教本』『最新バイエルピアノ教本』『指づかいつきバイエルピアノ教本』というように各社から数種類のバイエルが出版されているが、原本の楽曲に加えて、原著に英独日語の対訳の形式をとるもの、バイエルの楽曲に加えて応用練習曲の収録がされているもの、すべての音に指遣いが付されているもの、楽典を巻頭に置くことで独習者にも効率よく学ぶことができるよう配慮されたもの等、多様性に富んでいる。

また、養成校向けに編集されたピアノテキストを採択している短期大学・大学が、約24%にあたる66校あった。最も使用頻度が高く、24校の採択を確認できた『教職課程のための大学ピアノ教本』ではバイエルを中心に、ツェルニーの練習曲を適宜取り入れながら移調も加えて、難易度順に並べられている。左手の伴奏パターンを集中的に学習するため、弾き歌いに必要な様々な伴奏型に対応することが期待できる。また巻末には小品が収録されており、練習曲による技術の習得だけでなく、音楽の美しさや楽しさが実感できるよう工夫されている。他にも、養成校向けに編集されたテキストには、初心者でも弾くことのできる小品、マーチ、童謡等、幅広い楽曲が収録されており、それぞれ効率よく学習できるよう配慮されている。

一方、『バーナムピアノテクニック』『トンプソン現代ピアノ教本』『バスティンピアノベーシッ

クス』『グローバー・ピアノ教本』のようなアメリカ系のピアノ教本や、『メトードローズピアノ教則本』等のフランス系のピアノ教本など、一般的なピアノ教本を使用している養成校は、全体の10%に満たない21校であった。

3. 弾き歌い用テキストの使用状況

対象校363校のうち、弾き歌い用テキストが確認できたのは227校であった。使用されているテキストは102種類に上り、大学オリジナルのテキストと思われるものも5校あり、複数のテキストを使用する学校も認められた。

〔表2〕は採択校数が4校以上のテキストを分析したものである。

次に採択校数が多い上位6冊を比較する。

①こどものうた200 (チャイルド本社)

掲載曲数が202曲と多いのが特徴。後述する『続こどものうた200』と合わせて採択している学校も多い。また手遊び歌、わらべうた、絵描き歌が計47曲含まれており、遊び方も図式で記載されている。伴奏形態は簡易伴奏である。

②こどものうた100 (チャイルド本社)

簡易伴奏とオリジナル、またはそれに近い伴奏の両方が載っているのでレベルによって選ぶことが出来る。またコードネームが記載されているので自分で伴奏をアレンジすることも可能である。

③続こどものうた200 (チャイルド本社)

『こどものうた200』の約20年後に出版されたため、平成に作られた比較的新しい曲も含まれる。曲数が増え、伴奏も弾きやすい。

④幼児のための音楽教育 (教育芸術社)

わらべうたから愛唱歌、マーチ、合唱曲まで幅広く網羅しており、幼児教育の理論、楽器の奏法、月ごとの指導内容等、楽典、コードネーム等、解説部分も充実している。

⑤簡易伴奏によるこどものうたベストテン (ドレミ楽譜出版社)

〔表1〕全国の養成校におけるピアノ教則本の使用状況

分類	採択校数	内訳	テキスト名	編・著・監修者	出版社
バイエル	166 (59.1%)	48	標準バイエルピアノ教則本		各社
		13	全訳バイエルピアノ教則本		各社
		6	バイエル・ピアノ教則本 New Edition 「やさしい楽典」付	伊藤康英	音楽之友社
		5	おとなのためのバイエル教本	板東貴余子、本間正治	ドレミ楽譜出版社
		4	指づかいつきバイエルピアノ教本	木村ケイ	全音楽譜出版社
		4	Let's play the BEYEL	高御堂愛子	圭文社
		2	新訂 標準バイエルピアノ教則本	不明	音楽之友社
		1	最新バイエルピアノ教則本	柿田和子	全音楽譜出版社
		1	大人のための独習バイエル	不明	ヤマハミュージックメディア
		1	なるほど！バイエル	衣川久美子、古庵晶子、 篠原真紀子、山崎和子	サーベル社
		1	必須50課題を厳選 短期修了バイエル教本	森本琢郎、池田恭子	ドレミ楽譜出版社
		80	その他バイエル（バイエルを使用しているが、シラ バスからは詳細なテキスト名等は不明なもの）		
		(65)	バイエル教則本		
		(12)	バイエル		
(1)	バイエル上・下巻				
(1)	子供のバイエル上・下巻				
(1)	聖徳バイエル				
一般の ピアノ 教本	21 (7.5%)	10	バーナムピアノテクニック 各種		全音楽譜出版社
		4	バステインピアノベーシックス		東音企画
		2	メトードローズ・ピアノ教則本		音楽之友社
		1	グローバー・ピアノ教本		ヤマハミュージックメディア
		1	トンブソン現代ピアノ曲集		全音楽譜出版社 他
		1	ラーニング・トゥ・プレイ		全音楽譜出版社
		1	全訳ハノンピアノ教本		各社
		1	新編 こどものハノン・下		学研
養成校 向け 教本	66 (23.5%)	24	教職課程のための大学ピアノ教本	大学音楽教育研究 グループ	教育芸術社
		6	保育音楽のためのピアノレッスン	和泉短期大学 ピアノ教育研究会	共同音楽出版社
		5	保育士・幼稚園教諭・小学校教諭養成の ピアノテキスト	全国大学音楽教育学会 九州地区学会	カワイ出版
		4	幼稚園教諭・保育士のためのピアノ入門	東京福祉保育専門学校	ドレミ楽譜出版社
		4	幼稚園教諭・小学校教諭・保育士養成課程のための ピアノテキストーレッスン24とその応用	吉野幸男 他	ドレミ楽譜出版社
		3	楽譜が読める・弾ける STEP20	甲斐彰	音楽之友社
		3	ピアノへのアプローチ 4 Steps	伊藤嘉子、岡本成美、 奥田恵子、川井田潤一、 木許隆、瀬川和子、 田中常雄	音楽之友社
		2	基礎から学べるピアノ 1, 2, 3	本廣明美、加藤照恵	ドレミ楽譜出版社
		2	みんなピアノ大好き！	坪能由紀子、味府美香、 片岡寛晶、木下和彦、 駒久美子、早川富美子	全音楽譜出版社
		1	初級ピアノテクニック速習ステップス	生地加代、大塚豊子、 奥田恵子、加藤あや子、 阪田順子 他	音楽之友社
		1	最新初等科音楽教育法	初等科音楽教育研究会	音楽之友社
		1	技術・課題要素を明確にしたピアノ曲集 上巻	松本俊穂、丸亀加壽子	権歌書房
		1	やさしく学べるピアノ曲 100	関西地区大学 音楽教育学会	音楽之友社
		1	やさしくたのしいピアノ・メソッド1 改訂版	鷺見五郎	共同音楽出版社
		1	ピアノ教本 レッスンとワーク ～歌ごころのある演奏をめざして～	公文征子、高塚由美、 飯泉祐美子	共同音楽出版社

養成校向け教本	1	たのしくひける保育者のためのピアノレッスン こどものうたからソナチネまで全 200 曲	清原貴子、鷲尾領子	数研出版
	1	大学生のためのピアノアルバム	金指初恵	大学図書出版
	1	この一冊でわかるピアノ実技と楽典	深見友紀子、 小林田鶴子、坂本暁美	音楽之友社
	1	子どもの表現活動に役立つピアノテクニック	小川宜子、木許隆、 妹尾美智子	圭文社
	1	大人のためのピアノ教本	橋本晃一	ドレミ楽譜出版社
	1	幼稚園教諭・保育士を目指す人のための 新しいピアノ教則本	田口雅夫、高崎和子、 大輪公壺	カワイ出版
	1	New おとなのピアノレッスン	不明	共同音楽出版社
その他	28 (9.96%)	20 レベル対応		
		7 大学オリジナル教材		
		1 プリント配布		

〔表2〕主要弾き歌い用テキスト

	テキスト名	編・著・監修者	出版社	発行年	収録曲数	音域	コード	採択校数
1	こどものうた 200	小林美実	チャイルド本社	1975	202	a-f ²	×	51
2	こどものうた 100	小林美実	チャイルド本社	1982	106	a-e ²	○	27
3	続こどものうた 200	小林美実	チャイルド本社	1996	200	g-g ³	○	24
4	幼児のための音楽教育	石井恵子 他	教育芸術社	2010	95	g-e ²	○	14
5	簡易伴奏による こどものうたベストテン	板東貴余子	ドレミ楽譜出版社	2001	85	g-c ³	○	12
6	ポケットいっぱい <u>のうた</u>	鈴木恵津子・ 富田英也	教育芸術社	2011	144	g-e ³	○	8

全国の幼稚園・保育園の先生方へのアンケート調査を元に、こども達の好きな歌を「毎日の歌」「季節の歌」「行事の歌」などに分類し、項目ごとに上位 10 曲を掲載している。また、全曲にコードネームがついているので、学生のレベルに応じて伴奏のアレンジが可能である。

⑥ポケットいっぱいのうた（教育芸術社）

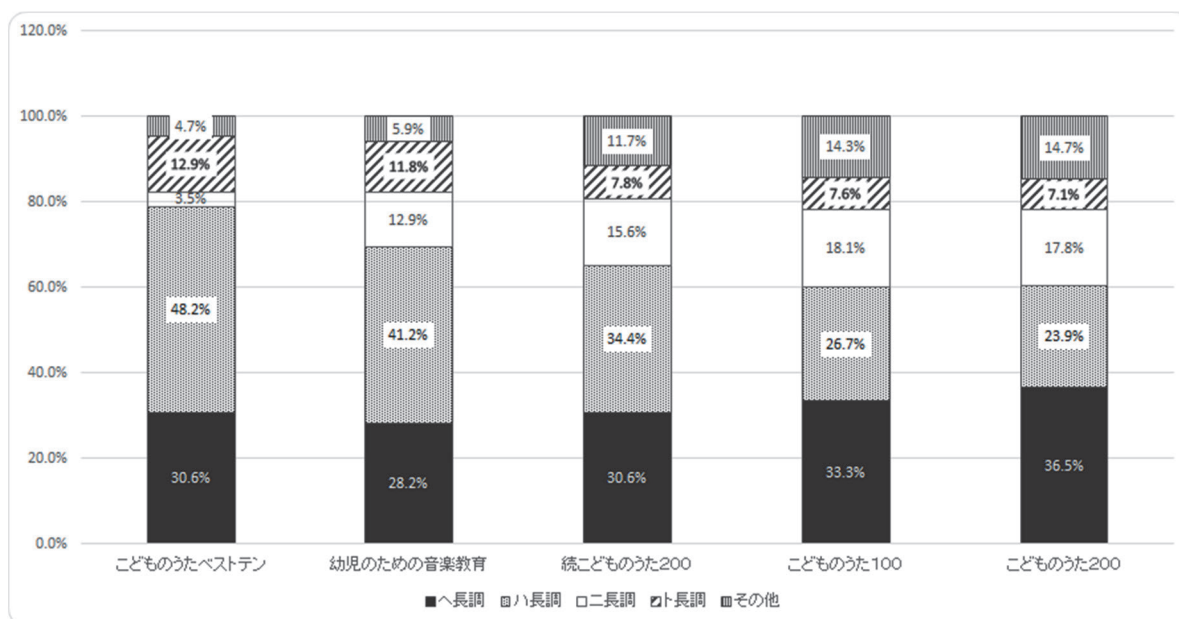
長年にわたる保育現場での実践をもとに、様々な行事や日常生活で使える歌を厳選している。各曲に指番号やコードネームによる伴奏法が施され、さらに小学校歌唱共通教材や英語の歌も掲載されている。簡易伴奏からオリジナル伴奏に至るまで、初心者から上級者まで活用できる。

『こどものうた 200』以外のテキストにはコー

ドネームが記載されている。確かにコード付きの楽譜はコードさえ覚えれば簡易伴奏よりも弾き易いというメリットがある。しかし、コード奏法は各調の基本コードをマスターしなければならないことや、基本以外のコードへの対応が難しくなってしまうという問題がある。

また調性については〔図2〕に示したように、全体の約9割がハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調で占められている。ほとんどの曲が a-e² の音域であるのは子どもが歌い易い音域であるのと同時に、保育者にとっても弾き易い調といえる。しかし、実際の保育現場では主調が何であれ、即座に子どもの声に合った調性に移調する力が要求される。ピアノ経験が長くても弾き歌いの能力は必ずしも比例するとは限らない。こうした能力を卒業迄に身に付けることが必要である。

〔図2〕 弾き歌い用テキスト別調性選択



IV. テキストの使用パターンによる分類

1. ピアノ教則本・弾き歌い用テキスト併用型

分析結果（Ⅲ－1）から、ピアノ教則本と弾き歌い用テキストの使用内容により、「ピアノ教則本・弾き歌い用テキスト併用型」「ピアノ教則本単独型」「弾き歌い用テキスト単独型」の3つのパターンに分類される。ここでは、ピアノ教則本・弾き歌い用テキスト併用型について考察する。

ピアノ教則本は、バイエル系、一般のピアノ教本、養成校向け教本の3つに大別され、それぞれの採択校数は166校、21校、66校である（Ⅲ－2）。しかし、弾き歌い用テキストの併用では、バイエル系96校、一般のピアノ教本11校、養成校向け教本51校となり、一般のピアノ教本の併用率は5割にとどまっている。このケースでは、弾き歌いはピアノの演奏技術が前提となることから、初学者はまずピアノ実技に専念し、その後他の授業で弾き歌いを学修するのではないかと考えられる。このことはシラバスからも確認された。

次に両テキストの組み合わせパターンを見てみ

よう。〔表3〕は2つ以上の採択校に絞って、具体的なテキスト名を挙げて分類したものである。バイエル系と「こどものうたシリーズ」（こどものうた200・続こどものうた200・こどものうた100）を併用するパターンは、57校に上り、バイエル併用型（96校）の約6割を占める。バイエルで学んだ右手がメロディ、左手が伴奏というステレオタイプを弾き歌いの中で実践に移すために、簡易伴奏による「こどものうたシリーズ」は最適なテキストと位置付けられるだろう。

一方、養成校向け教本の中では、5校が『大学ピアノ教本』と「こどものうたシリーズ」（こどものうた100・こどものうた200）を採択しているが、バイエル併用型と異なり、その組み合わせは多様である。養成校向け教本は、保育現場で使えるノウハウを身につけられるよう、各種特色をもった内容で構成されている。それぞれの併用パターンを丁寧に読み説くことは、新たな教則本作成の可能性に繋がると期待される。

2. ピアノ教則本単独使用型

研究対象363校のうち、128校（36%）でピアノ教則本の単独での使用が確認できた。今回は「ピアノ演奏の導入」に該当する授業のシラバス

〔表3〕ピアノ教則本・弾き歌い用テキスト併用パターン

ピアノ教則本	弾き歌いテキスト	採択校数
バイエル系	こどものうた 200	32
	続こどものうた 200	13
	こどものうた 100	12
	幼児のための音楽教育	6
	簡易伴奏によるこどものうたベストテン	3
一般のピアノ教本「バーナム」	こどものうた 200	2
養成校向け教本「大学ピアノ教本」	こどものうた 200	3
	こどものうた 100	2
	幼児のための音楽教育	2

の調査によるものであり、その後のシラバスを調査すると、後に弾き歌いのテキストを導入し、ピアノ教則本と弾き歌い用テキストとの併用という形で授業を進めている養成校が多い。つまり、読譜、ピアノ演奏の技術の基礎を習得したのち、弾き歌いの実践という形をとっている（IV-1 参照）。

3. 弾き歌い用テキスト単独型

一方、弾き歌い用単独テキストを使用しているのは53校（15%）である。基礎教材を用いずに弾き歌いをするのは困難が予想されるが、各校のシラバスからは授業の進め方を創意工夫することでこれに対処している様子が窺える。例えば、全体授業でソルフェージュや音楽理論で基礎を学んでから弾き歌いに移行する学校、90分授業のうち半分をソルフェージュに当てる学校、声楽の授業と音楽理論の授業から弾き歌いに結びつけていると推測される学校、コードネームの学習から弾き歌いに繋げる学校、少人数のグループレッスンで授業を行う学校等が挙げられる。

V. 調査結果の考察

保育者養成校に入学してくる学生の約半数がピアノ初学者という近年、ピアノの授業で使うテキストの採択は大変重要な意味を持っている。バイエル離れが進んだ現在でも尚、保育者養成校ではバイエル系のテキスト使用率は圧倒的に高い。バ

イエル教則本はバイエル自身が「この本は、はじめてピアノをひく人が最もやさしい方法で、良いピアノ奏法を会得するように手ほどきをするという目的をもっています。これはこどものために、特に幼い者のために、あまり広い範囲にわたらないで、段階を追って進んでいくように考慮されています」¹¹と記しているように、ピアノ初学者が同種の技巧の反復練習をすることで無理なくピアノ技術を修得できるように作られている。また習熟度に伴ってバイエルの番号が進んで行くことも、学習者にとっては自分の演奏レベルが把握でき、学習意欲を高め、達成感を得ることに役立つと言えよう。バイエル系テキストの採択が多い理由には、教材としての使い勝手の良さだけでなく、保育士や幼稚園教諭の採用試験の際にバイエルから出題されるケースが多いこと¹²も関係していると思われる。

一方、弾き歌いは、学生達が将来保育の現場に就いた時に余裕を持ってピアノを弾きながら歌い、尚且つ子供達の様子を見ながら指導できるようになることを目標に置いている。「幼稚園教育要領」及び「保育所保育指針」においても、その五領域中に挙げられた「表現」のねらいのひとつに「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」とあるように、保育者には子供に歌を教える指導だけではなく、子供の豊かな表現を引き出す指導が求められている。子どもにとって歌うことは自分の喜びの感情を自己表現する最も身近な活動であるが、子どもから歌う楽しみを引き

出すには保育者自身が音楽を楽しみながら自身の感情を自己表現できることが大切であろう。養成校の授業においてもピアノの演奏技術にのみとられず、学生が楽しんで音楽に触れているかを指導者は留意する必要がある。

結び

今回の研究は、全国の養成校を対象に、最新のデータに基づいた使用テキストの統計的な調査である。

近年、養成校ではピアノ経験がない学生や音楽経験の浅い学生が増える傾向にあるが、定められたカリキュラムの時間枠の中で教育効果を上げるために、教員は試行錯誤を強いられている。教員にとって、ピアノ教則本や弾き歌い用テキストの採択は最も重要な職務のひとつであるが、これまで両テキストの採択状況に関する全国規模による客観的な調査研究はなかった。

バイエル教則本は、80年代に痛烈なバッシングに遭い、一挙にバイエル離れが進んだと言われたが、本研究から実際には圧倒的な使用数を計上していることが明らかになった。また、養成校向けのテキストも、バイエル教則本から抜粋した練習曲の転調、順序変え、他の作曲家による練習曲の併用など、新たにバイエルを主軸に置いた内容に再編成した教則本も少なくないことが確認された。バッシングを経たにも関わらず、ピアノ教則本を使用している養成校の約6割がバイエル系テキストを使用しているのは、地域によって保育士や幼稚園教諭の採用試験の際にバイエルから出題されるケースが多いことに加えて、バイエル系テキストは初学者でも無理なくピアノを弾けるように作られているためであると考えられる。またバイエルの進捗状況によって、安易に学習者の音楽的実力と捉えがちな現状も関係しているだろう。一方、弾き歌い用テキストはチャイルド本社の「こどものうたシリーズ」が全体の4割5分を占め、続編が刊行されるなど、根強い人気を誇っている。

養成校における音楽系授業には多様な授業形態があり、相乗的な教育効果をもたらすように工夫したカリキュラムが組まれている。今後の研究課題として、採択されたテキストがカリキュラム全体とどのような整合性を持っているかを検証していきたい。また、採択数の少ない「ピアノ教則本・弾き歌い用テキスト併用パターン」を丁寧に読み取ることは、新たな保育者養成教育への可能性を見出すきっかけになるかもしれない。ピアノ初学者にとって効率的に学べ、且つ豊かな音楽表現を培うことのできる教則本を試作することを、最終的な目標に置きたい。

引用文献

1. 近藤久美 1995「初心者向けピアノ教本についての研究(1) —バイエルピアノ教則本の場合」『一宮女子短期大学紀要』34, pp.176-177
2. 原 題 “Vorschule im Klavierspiel” Op.101 音楽取調掛では Carl Pruffer 社刊 (Boston) “Elementary Instruction Book for Piano” (英語版) を使用。
3. カール・ウルバッハ Karl Urbach (1803 - 没年不明) によるピアノ教則本。原題 “Neue (Preis-) Klavier Schule” 1877年出版されドイツで広く普及した。音楽取調掛では Edward Schuberth 社刊 (New York) “Prize Piano School” (英語版) を使用。
4. 安田寛 2012『バイエルの謎』音楽之友社、pp.128-130
5. 同書、pp.26-27
6. ロナルド・カヴァイエ、西山志風 1987『日本人の音楽教育』新潮社、pp.67-68
7. 柏瀬愛子・牛田幸子 1986「ピアノ教則本「バイエル」について分析とその活用」『名古屋女子大学紀要』32, pp.217-229
8. 宮脇長谷子 2001「保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題—養成校へのアンケート調査を通して—」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』15-W, pp.1-11

9. 小倉隆一郎 2013「幼児教育及び小学校教員養成課程におけるピアノ基礎技能テキストの考察」『文教大学教育学部紀要』47, pp.23-32
10. 衣川久美子・山崎和子・坂井康子 2013「保育士、幼稚園・小学校教諭養成校で用いられているこどもの歌—近畿圏内の1989年から2013年に出版されたテキストの分析その1—」『甲南女子大学研究紀要』49, pp.85-97
11. フェルディナント・バイエル 「まえがき」『全訳バイエルピアノ教則本』全音楽譜出版社
12. 衣川久美子・山崎和子・由井敦子 2016「幼稚園・保育所（園）・小学校の採用試験における音楽に関する出題傾向—総合子ども学科2011年～2014年の求人票経年分析と就職状況—」『甲南女子大学研究紀要』52, p.65

辻 浩美 (埼玉東萌短期大学非常勤講師)

鹿戸一範 (埼玉東萌短期大学非常勤講師)

田中麻衣 (埼玉東萌短期大学非常勤講師)

参考文献

- 東京藝術大学音楽取調掛研究班編 1976『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社
- 市川理恵 1996「音楽取調掛におけるピアノ教育の導入」『日本女子大学人間社会研究科紀要』第2号
- 佐藤峰雄 1996『ピアノ入門書再考』音楽之友社
- 市川理恵 1999「音楽取調掛におけるピアノ教育の実態—「教科細目」及び使用教則本の考察を中心に」『音楽教育史研究』第2号
- 国府華子 1999「わが国における明治期のピアノ教育—音楽取調掛、東京音楽学校を中心に—」『音楽教育史研究』第2号
- 衣川久美子・山崎和子・由井敦子 2016「幼稚園・保育所（園）・小学校の採用試験における音楽に関する出題傾向—総合子ども学科2011年～2014年の求人票経年分析と就職状況—」『甲南女子大学研究紀要』第52号
- 厚生労働省「指定保育士養成施設」(2016年4月1日時点)厚生労働省ホームページ、www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000138290.pdf
2016年7月1日